

留守居

水野 仙子

實は「眞」にあらずして、「眞」の虚像なるを。純き額を誰か見たる、誰か愛したる。汝が求むる敵は外にあらずして内に在り、汝まことに「眞」の正躰を攫み出さんと欲せば、汝の眼を破れ、汝が心臓を把つて微塵に碎け。而して後汝は眞に「嘘」を殺すを得ん。殺して以て汝が求むる正躰を得ん。

「吾は今樂しく死なん、君吾を愛すればなり」とヴェルテルの一語、偽を信じ、偽に歸依する者は幸なるかな、よく知れり。不幸なる近代人よ、汝は「眞」に呪はれたり、魅せられたり。汝は不幸なる贈物を受けたる。汝は汝が藏する「理性」の鋭き鎧に、汝自身を刺され傷められ、而かも求めて竟に得ず。

In allen Tiefen
musst du dich prüfen,
zu deinen Zielen
dich klar zu fühlen,
Aber die Liebe
ist Trybe — Dehmel.

あゝ死して自らを証さんか(dich prüfen)果た生きて濁り(Trybe)に、嘘偽に酔ひなむか、蓋近代人が歩む一條の道、將に絶えなるとする所、一の碑銘あり。曰「嘘偽に生きよ、然らずんば虚無に死せよ」

眉に眩しいやうな光りのみちた午後である。私ら二人の住居を訪問れるとて來た湖畔の女が、道すがらそれをのぞんで「ま、白い家が!」と詩人らしく吃驚した、代々木練兵場のテントの家々が(それには糧秣が一ぱい積まつて居る)目の前の畑を越えて松林をあしらつて、からつとしたあたりに浮き出たやうに見えて居る。風こそ少しつめたけれど、この二三日の春めいたこと。

再び家の中に戻つて、何するともなしに私は机の前に殊更着物の前を合してきちんと座つた。暫く机に頬杖ついて、動いたあとの荒い息を納めて居ると、さつ／＼と屋根續きの隣りに竹を削る音が、あたりの静かさを破らぬ程の調和をもつて、どうやら暢氣そうにきこえて來る。そこには竹籠を編む若い男が一人、終日の言が慄えるやうに聞こえて來るが、折々御飯を焚きに來る母親が顔を見せた時だけの言ひ聲が聞かれる私は此間から母子の會話を聞くとともにしに聞いつた、その縁談のことなどを想像して居たが、長い間ほんやりして居るといふことが大好きな癖に、また一方それが非常に氣が揉めてならないのが私の性分で、直

「おてんさでようございますねえ」と門のところまで美以さんの聲がする。岩田さんのをばさんが表に出て張り物でもしてたのだらう。茶ぶだいの脚を折つて伏せて、そこらに散らかつて居た紙片を拾ひあげて、曲つて居た机の前の座蒲團を直したが、さて私はそれから何をしたいか一寸まごついた。小石川まで一寸と出掛けて行つた美以さんの歸りはどうせ夕方になるのだらう。それまで私は何をしてたらいいか、本を讀まうか何か書いてみようか、それとも襦袢の襟でもかけ直して置かうか。家の中に唯一人の私は何をしようとしたかは勝手だ。何か奇抜な惡戯をやつて、歸つて來た美以さんを吃驚させてやりたいやうな氣もするし、押入れの中にも掃除しておいて、夜になつて蒲團を出す時に「まア!」といはせるのも面白い。併しながら細かな御用からして置かなければならないから、私は先づ飯櫃を洗つてそれを裏の四ツ目垣の竹の先にかけて先乾だつた足袋を日あたりの竿にかけ直したりした。

ぐにふつと起ちあがつてそこらを見廻した吐き、私はふと或る仕事を思ひついて、本箱の引出しから幾切れかの餅を取り出した。微びかゝつたと言つてそのまゝにして置いたのを、今暇にあかして削らうといふので、手近にあつた東京全圖を机の上に廣げて、其上に新聞紙を敷いて私は、早速ナイフの先でこつ／＼とはじめた。

氣まぐれにやり出した此仕事は、意外にも私に微といふ或る色彩の美しさを教へた。白、赤、黄、緑、目に入るのはたゞこれだけであるが、肉眼に訴へない他の色もそのうちに隠れて居るのだらう。赤が一番深く黒になつて植はつてあるのを、それはナイフの先で扶ぐるやうにする。

するうちに手先に對する注意はやう／＼薄らいで、幽かに指の先の疲勞を感じながら、散れ／＼に考へは考へを追ひ、曾ての折々の印象などが泛び出て來る。手の先は猶動いて居る。

あの時あの折のあの人の態度、あの言葉、などい考へてゐるかと思ふと、ある時ある場合に言つた自分の言葉や行爲を、も一度頭の中で繰りかへして見る。かと思ふと人の顔がちら／＼と通り過ぎて行く。

黒い上着を着て居た。二つある小さな窓の貯金爲替受付口と書いた一つから、黙つて爲替券を差し出すとそれを受取つて小爲替ならば消印をよく調べ、もしくは通知表の字と一字／＼見くらべて、さて一點も間違へのないところで引出しを開ける。それが紙幣だつたならばたとひ一枚でも、海綿をつまんで幾度も／＼數へて見て、また思ひ切り惡るさうに數へて見る。いつでもあつけにとられて眺める、いつものあの郵便局の人の、眉の迫つた神經質らしいあの顔！

「あゝあの女がまた！厭な顔、厭な顔、なんといふまア！何氣なく歩いて居た足がかうして襲はれるやうに立ち止る時がある。屯ろして居る幾條もの煤煙をのぞむたびに、此處から都會といふ感じがいつも新にす。府下から市中へと志す時にぶつかるのがこの新宿の停車場である。品川行と掲げて去つた列車の煤煙が濛々とあがつて來て線路に架した橋に當つてわれて騰る。其煤煙の中にかすむ人が再びはつきりして來るとあゝまた其處に例の女が！風の日だつた。初めて其女の顔を見たのは、やつぱり美以さんと一緒だつた。

「何て厭な顔でせう！」

「何て厭な顔でせう！」

く角等の方から駆け付けた人力車がまたとまる。車の上の中折の人は腕組みをして居る。はらり／＼と二人づゝ來て皆線路の方を今か／＼と眺めて居る。電車が通つて柵がひかれると、またごちや／＼と入り亂れる。傍の架橋の上に立つて、それがたわいもなく面白く眺められたことなぞも思ひ出した。

私は間もなく仕事に飽きた。ナイフを握つた指が痛くなつて、首から右の腕へかけて非常な重さを感じる。削つた鬚が汚く目の前にうづ高くなつてゐるのを見ると私はナイフを投げ出して、そして肩をあげて首の運轉を試みた。

處女作

ゆめ

路

破れたる衣は縫はずもよしや母汝が兒の戀はまた破れたり二寸ほどたけ低き子と別れたる壁にもたれて物おもひする「旅人あり繪筆を抱いてここに死す」と刻みてあらば悲しからずや野の石やこゝに抱きぬ涙しぬ白き花さき夏とはなりぬ一つの世に掬られけむ少女子は袖屏風して忍び泣くもの紅絹裏の君が袂に見出しぬわが處女作とダリアの花と落日は手傷の如く赤かりき白馬に君をぬすみ去る時

ありふれたる
夕暮の情調

あゝ又も夕となれば、日の光、うすく、冷たく、我目路をたゞよひ流る。

枯草の丘——
丘の上の長高き樹よ。
枝はまばらに、
姿を見ゆる小さき鳥よ。
悲哀をうたふが如し、
あたりと共に、
ひなしくも暮れゆく胸よ——
磔多き道、
けた／＼し歸の音、
鞭のひびき、
馬は忽ち遠くなりて、
彼方の空ものしづかに、
あゝ——光はいつか、
うすくらく夜の氣となりぬ。

と二人は一緒に言つた。青くて青くもない、黄色くて黄色くもないやうな顔色、一寸見れば十七八とも見える。或る日は廿六七に見えた。腫んだやうな、それで赤い唇を動かして人の顔さへ見ればぼく／＼と首を下げる。へつそりとした汚い羽織を着て、胸には南無妙法蓮華經と書いた袋がかゝつて居る。杖にのしかゝるやうに道行く人の顔を覗き込むけれども、人は大抵ちらと一瞥を與へたまふてさつ／＼と過ぎる——。私は此頃とこころ嫌はずその顔が時々目先にちらついて困る。

くらゐんと青梅街道口の中野行の電車がとまつた。四五人の人が降りる。待つて居た二三人が乗る。車掌の笛がピーと鳴るとまたぼうつと動き出す。我足の下でしゅう／＼と昌平橋行のが擦れ違つた。と踏切りの番人が、車のついた柵をすう／＼と開けて行く。兩側に留るに留つた人は、我先にと荷車人力車馬車電車、女男子供大人、ぞろ／＼と入り交つて線路を越える。後れ馳せに駆けつけた小僧が通り切らぬうちに、番人はまた柵を引きはじめた。新宿電車の終點の方から來た魚屋が一人荷を擔いだまゝそこに行きつまる。子供の手をひいた女中が來て柵にとまつた。がら／＼と勢ひよ